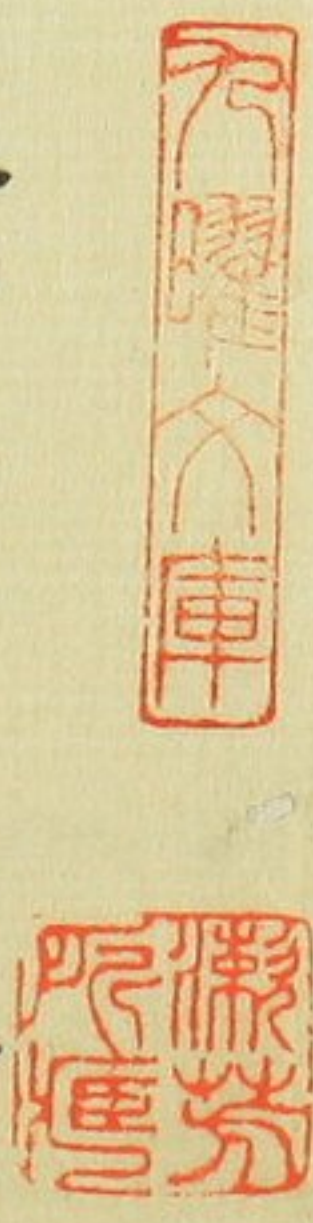


千草百子のはねはわきを折るを辛丁
毛々々々々ハ其年百七す年ふ々々々
形勢が志をすすれハ々々々々々カ海々
の々々々々々れ々々々々の々々々々々
わ々々々々々可々々々々々々々々々々々
い々々々々々々々々々々々々々々々々々
新来の人々々々々々々々々々々々々々



乃花を〜
 形き殿の席内トシにミウチは〜
 好〜
 此の〜
 のお〜
 は〜

あ〜
 あ〜
 實ハコト〜
 免コトアゲ〜
 とい〜
 つま〜

本巻乃翁玉の小指手法くつて源氏
物終結注釈せしめみきり多る事と
らくしる事なき其しを終りしと家に
人々の系圖と志し傳を可しと付し後
亦らねらくしる事なき其しを終りしと家に
刃をせしめたる事なき其しを終りしと家に
系圖と志し傳を可しと付し後
由はくしる事なき其しを終りしと家に
いふはくしる事なき其しを終りしと家に

るも其いふなりぬるもいふも
おほいしうも系臺手紙の森は見え
うさまし一拾はるるもあまらるる海は
祿とらるるもいふはくはくもあまらるる
よあまらるるもいふはくはくもあまらるる
そはくはくもいふはくはくもあまらるる
思ひはくはくもいふはくはくもあまらるる
月尔白ふ志路一集るる年とて合せて
こまらるるもあまらるるもあまらるるも

らあまらるるもあまらるるもあまらるるも
あまらるるもあまらるるもあまらるるも
あまらるるもあまらるるもあまらるるも

あまらるるもあまらるるもあまらるるも
あまらるるもあまらるるもあまらるるも
あまらるるもあまらるるもあまらるるも

北村久備

源氏物語系圖凡例

中より五末の源氏物語の系図を凡例としてありと
同様に今今其のうちにきこひをやうに改めら
るべきに古き系圖にかゝりていふべきことありしれ
ばあり

○卷の首を年号に於て源氏君の齡と年の教よりして
志すなり源氏君の齡を年教よりしてたるは一考の内に教
年と合したる事も何れもばをいつきん為あり但し
白文をより下ハ其君の齡を用也

○中より一の系図は女と婦とをも男の末に識したりと
古く系図を志す凡例より何れども又々に使らるる
りれは今の兄弟の次を志すありし次をのちに志すに
を改めたりとてそのいすべて女と男の次よりぬ

昔有たる天子の御名をまじは給はしとれど今く昔有る
天子に唯つくとつふい何と云は侍の御まありおの帝あり
ぬハ内又ハよとのことあり

○帝をとりてあまをせんくとの名を好しつとあり先相
臺の帝と云ハ相臺まもにともある帝ありは後小侍と
よむ人の其帝と云ふ料よりけに名附らるその二侍の
詞は相臺帝と云ふけいんえ受んくの名もその月一
大臣も御をもせんくともなく何ま何の大納言と云
ふに名附てせんくと云ふられたるなり

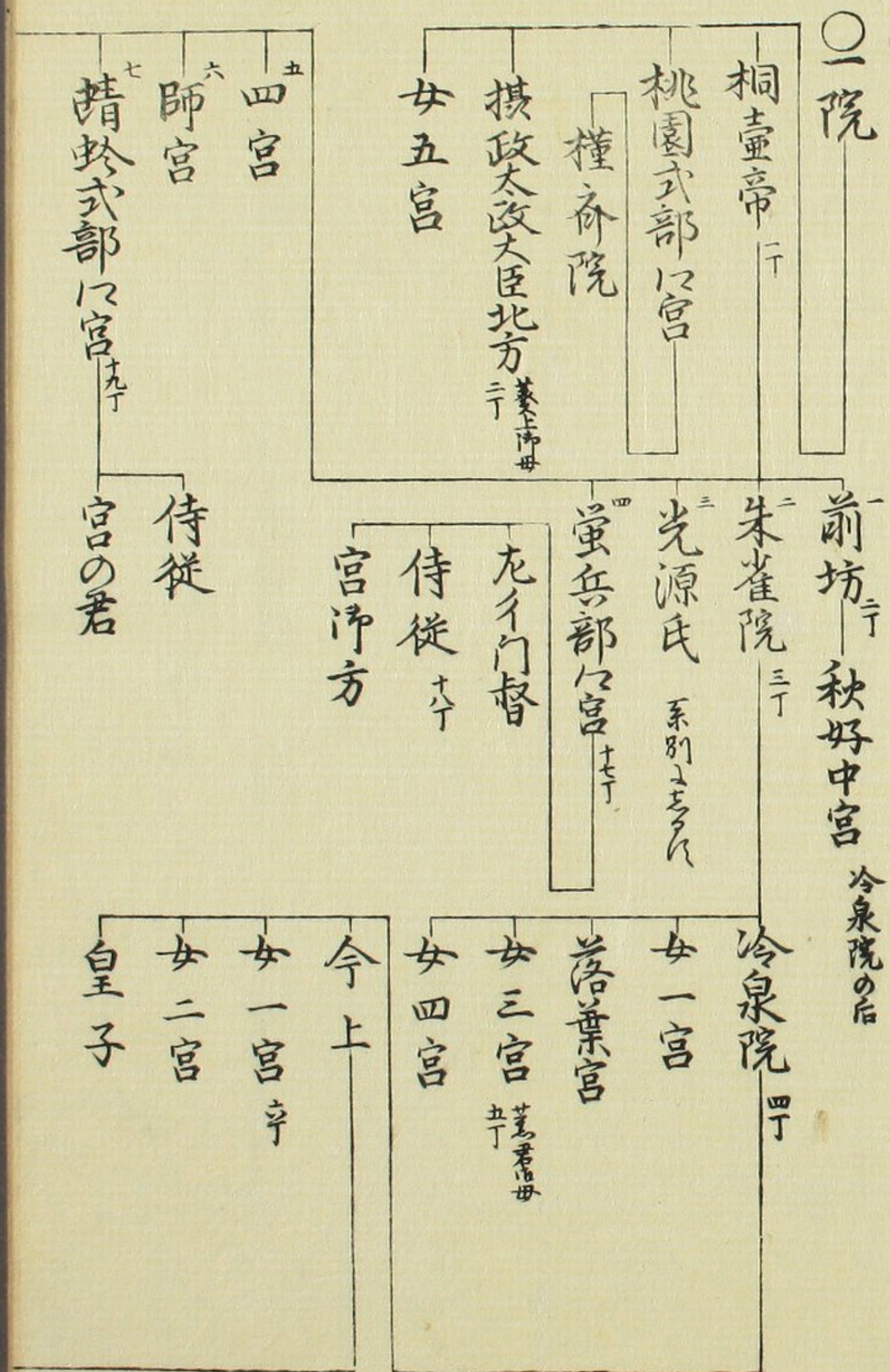
○かくんくといひすうの御語りぬの始より
お母をたたる名とお侍と云む後の人と云ふはいたる名と云
つあり侍りぬの始よりお母可名ハ光源氏白玄於宮
是又おはると夕顔と云ふといむ人の名附ハ秋好中宮權

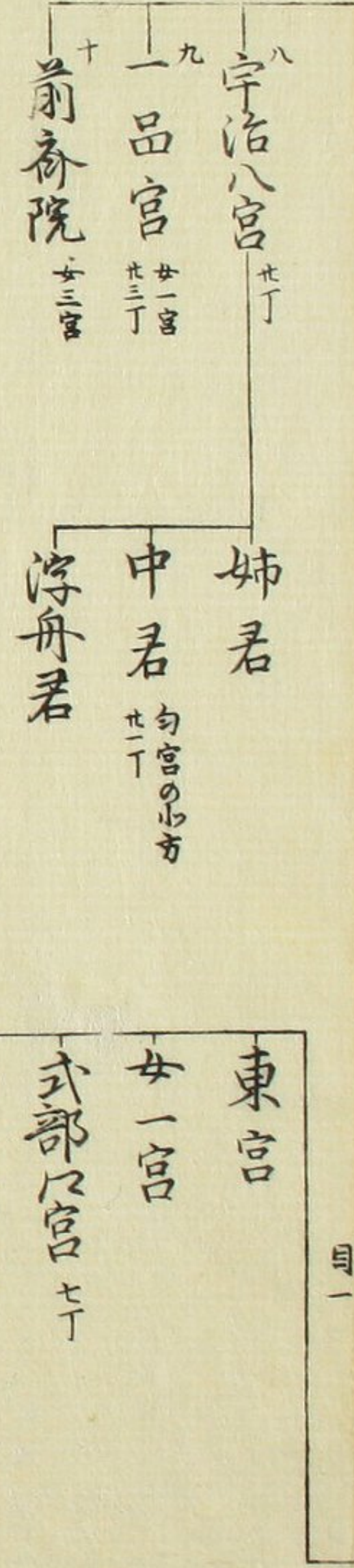
秋院などいふ秋好中宮と御語りぬの秋のゆかり
とのこととて秋好といふく受權の秋院も秋好の姫君と云
それハ秋好の父を源氏君と云ふといひたれは秋好の
秋好の父よと云ひ一姫君といふ言あるを後ハ秋院
不ぬきふはれおごりよむ人の名づけく權秋院と云
せありけりは是は一月一

○かくの名を後より好しつとふも亦そふといひありおと
詞とよらしてお母と云ハ臈月秋内の雲井屋などあり
おの詞をまの事ともせんくの名ともいふいふの言を
は又お母君などありまはれ名によりてつとハ相臺と云
行川など大長江梅など大長江などなり解ハ准と云る
屋

系圖上畧圖

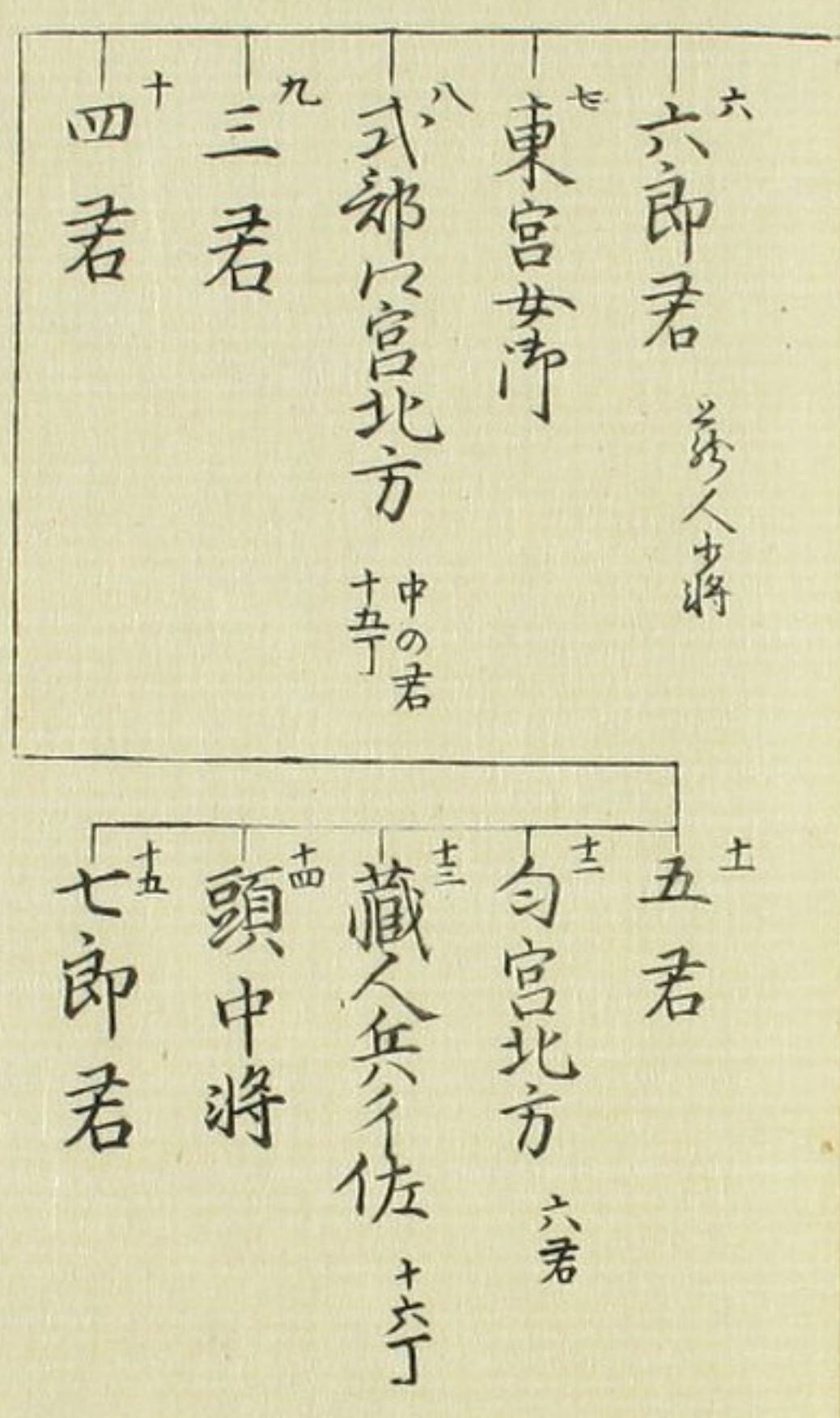
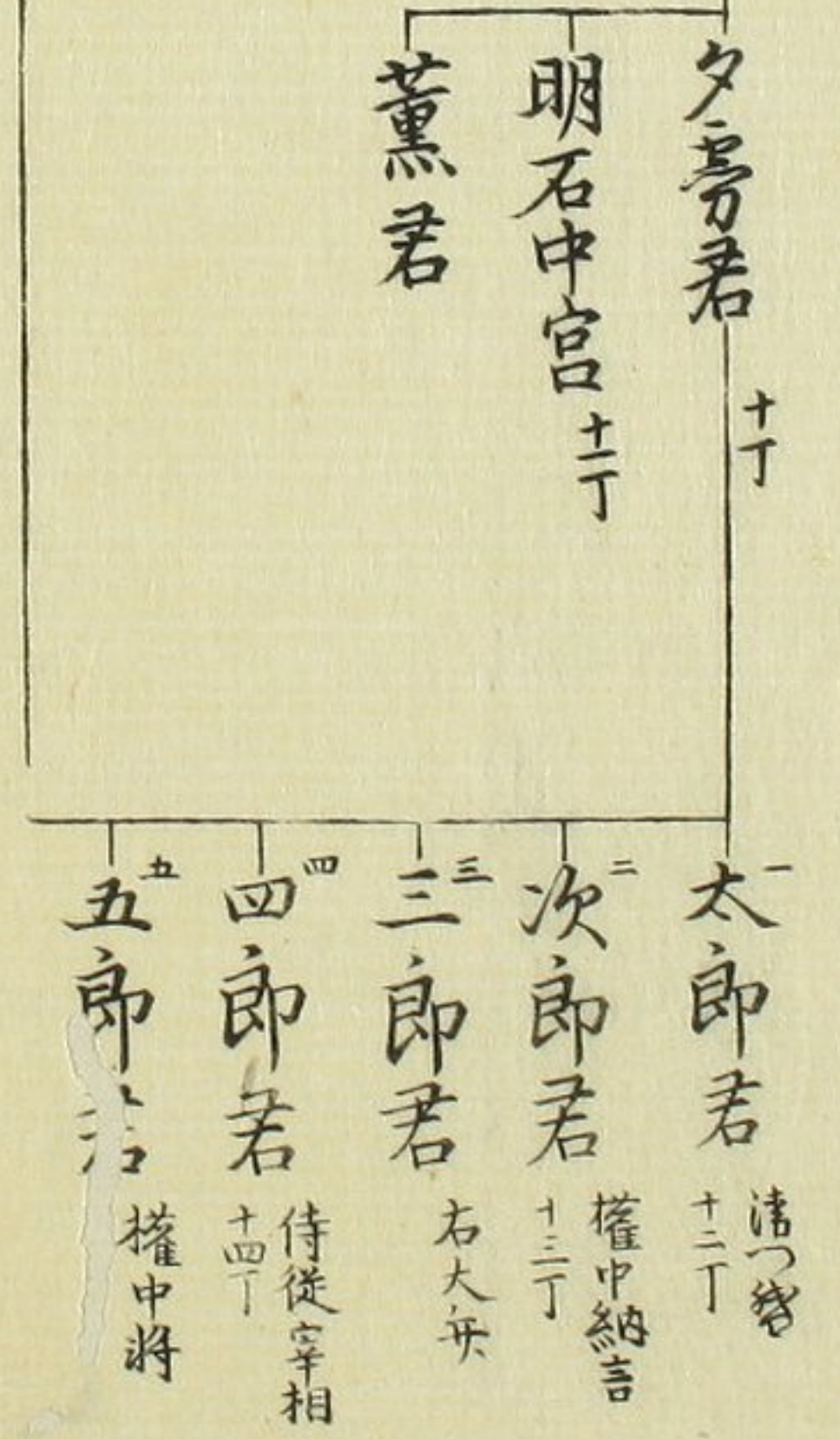
○皇胤





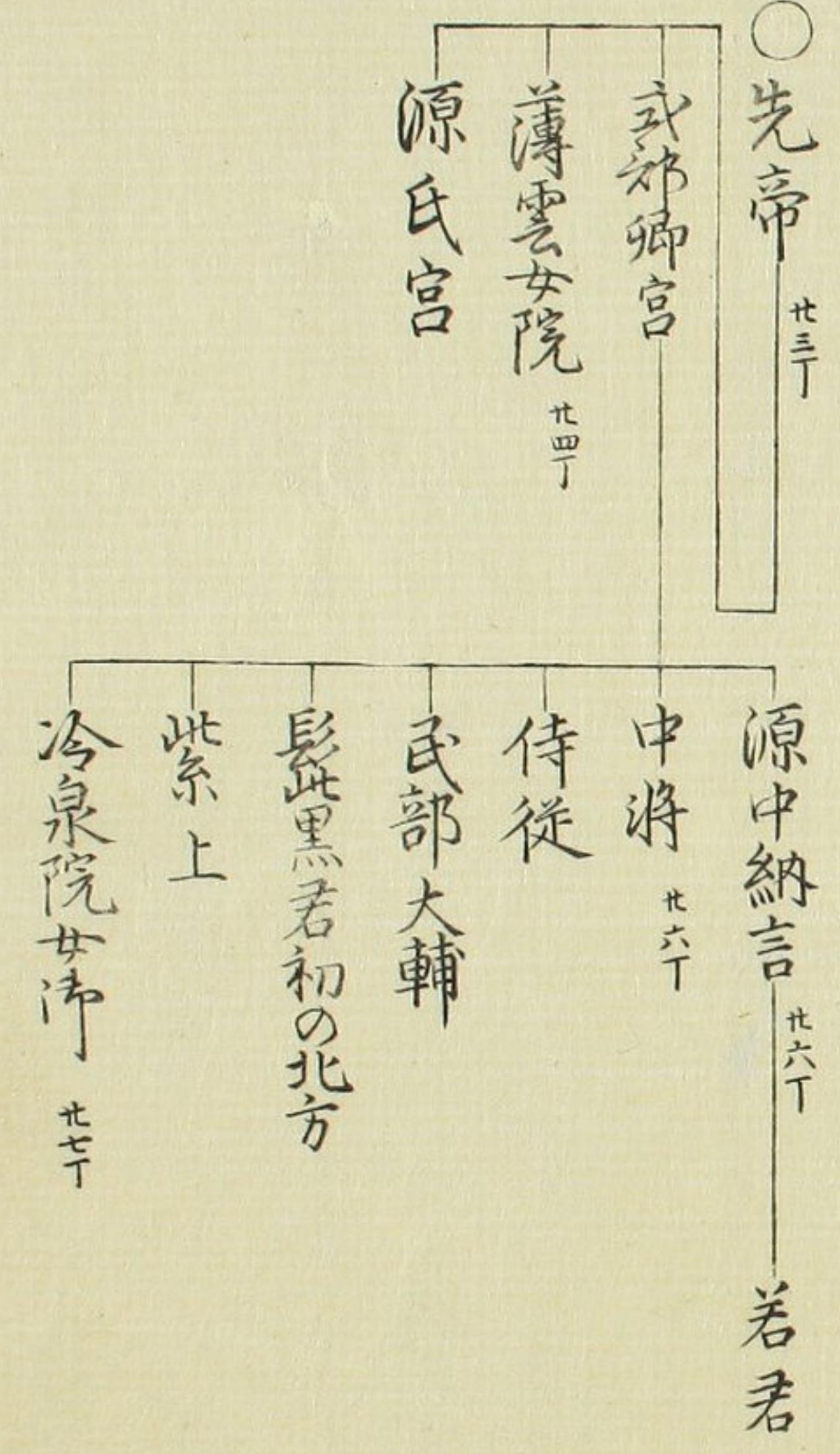
○光源氏

六條院 八丁



○先帝

北三丁



○常陸宮 七丁

禪師君

末摘花君 七九丁

○中務宮 七八丁

父

明石入道北方 七九丁

○大臣族

○撰政太政大臣 左大臣 三十一丁

柏木君 清門督

致仕太政大臣 頭中將

紅梅右大臣 攝政大臣 三十二丁

麗景殿女侍 東宮に侍る 三十四丁

左中弁 三十三丁

弘徽殿女侍 冷泉院の宮母 三十五丁

中君 紅梅侍方 三十五丁

左門督 後大臣

夕旁君北方 雲井君

大夫

權中納言 春宮大夫

鬘黒君北方 玉葛君 三十六丁

葵上 三十三丁

近江君 三十三丁

七 少納言 三十三丁
八 兵衛佐
九 後侍從
十 大夫君
十一 頭宰相
十二 頭中將

十三 藏人少將
十四 八郎君 三十三丁
十五 清乙子
十六 左門督
十七 藤宰相

○二条太政大臣 四十丁

大納言

頭弁

二 弘徽殿太后 相宣帝后 西后

麗景殿女侍 末葉院女侍

三 帥宮北方 四十丁

四 致仕太政大臣北方 四の君

五 君

七 四位少將 四十三丁

六 臈月夜内侍のつ

八 右中弁

○右大臣 四三丁

髭黒君 四三丁

真木柱上 四四丁

兼香殿女侍 朱雀院女侍

後中納言 二

頭中將 四四丁

次郎君 四四丁

左兵衛督 三郎君

右大弁 四郎君 四六丁

冷泉院女侍 中社君

頭中將 六

○大臣 四七丁

六条清息所

○父 四七丁

麗景殿女侍 相壺帝侍

花散里上

○大臣 四六丁

明石入道 播磨守

明石上 四六丁

按察大納言 四九丁

雲林院の律師

○父 五十一丁

常陸宮北方 赤橋花母

大貳の北方

○左大臣 五十一丁

女侍 冷泉院女侍

○左大臣 五十一丁

麗景殿女侍 二の君 兼香女侍 今上女侍 女三女侍母

大藏卿 五十二丁

修理大夫

○大臣 五十二丁

宇治八宮北方 大君中君侍母

父 五十三丁 常陸女北方 浮舟君侍母

左中弁 弁の尼

相壺更衣 源氏君侍母

○竹河左大臣 辛三丁
三位中将北方

系圖下畧圖

○卿大夫族

○右ノ門督 辛甲
空蟬君 伊予介の妻

右ノ門佐 小君

○伊豫介 辛五丁
河内守 紀伊守

藏人鞞負佐 右近將監

軒端の花 後人かゝの妻
辛六丁

○三位中将 辛六丁
夕顔上 玉著君内母
辛五丁

宰相 辛五丁
宰相の君

○山阿闍梨 キナ
 ○宰相藤原惟光 キナ
 少将命婦 キナ
 三河守妻
 兵衛尉 キナ
 藤内待のすけ タカ子君の息人

○尼君 惟光の父のめい
キナ
 僧

○太宰少貳 タ皇上のめい
キナ
 豊後介 兵衛太
六十丁
 次郎 三
 三郎 三
 揚名介の妻 六十丁
 姉 五 おゆい
 兵部君 六 りてき

○播磨守 六十丁
 源良清 六十丁
 五節君

○按察大納言 六十丁
 女 紫上の母

○父 六十丁
 北山僧都
 尼君 紫上の祖母

○父 六十丁
 少納言君 紫上のめい
 弁 紫上の女房
六十丁

○兵部大輔 六十丁
 大輔命婦 源氏右のめい

○父 六十丁
 和泉前司
 中納言君 朧月夜の女房

○太宰大貳 六十丁
 筑前守
 五節君 源氏右君をよひし人

○宮内卿の宰相 六十丁
 明石中宮の乳母

○按察大納言 六十丁
 五節君 乙女まくにし

○常陸介

浮舟君のまゝ父
六六丁

一 藏人式部丞

二 源少納言妻

三 讚岐守妻

四 藏人右近将監

五 小君 六六丁

六 左近少将北方

○大将

六六丁

左近少将

常陸介のむと

○父

六六丁

女

左近少将の婦人

妹

六八丁

○父

六八丁

左中弁

柏木君の乳母

中納言の乳母

朱雀院の女三三の
め

小侍従 女三三の乳母

○父

六九丁

父

一条淨息所

藤原家の母

大和守

少将の君

藤原家の女房

○父

七〇丁

大輔の君

宇治中君の女房

右近

口君の女房

○父

七〇丁

姉

右近

浮舟君の女房
七〇丁

○大藏大輔仲信

七〇丁

大内記道定の妻

○父

七〇丁

因幡守

出雲権守時方

○父

七三丁

阿爾梨

七三丁

浮舟君の乳母

七三丁

大とこ

○父

右馬頭

蜻蛉式部卿宮の後北方

宮の君のまゝ母

○父 七十三

横川僧都 七十四

尼君 右衛門督の女

常陸介の女

父 紀伊守

○衛門の督 小野尼君の夫 七十五

中将北方

○父 七十五

中将 小野尼君の二

禪師の君

○父 七十五

阿闍梨 小野信都の身

少將の尼 小野の尼君の身

系圖

系圖 系圖の序

桐壺 七十六

帚木

空輝 七十七

夕顔

若紫 七十八

末摘花 七十九

紅葉賀 八十

花宴

葵

柳 八十一

花散里 八十二

須磨

明石

遷標 八十三

蓬生

閑屋

繪合

松風 八十四

薄雲

朝貞 八十五

とと女

玉葛 八十六

初音 八十七

胡蝶

螢

常夏

篝火 八十八

野分

行幸

藤袴 八十九

真木柱

梅枝

藤裏葉 九十

若菜上

若菜下 九十一

柏木

横笛 九十二

鈴虫

夕霧

御法

幻 九十三

匂宮

紅梅

竹川

橋姫 九十四

椎本

總角 九十五

早蕨

寄生

東屋 九六丁

浮舟 九七丁

蜻蛉 九八丁

手羽 九九丁

夢浮橋

○ 皇胤

○ 一院

紅葉賀巻

源氏君 十九

正月の条より

桐壺帝

桐壺帝即位のよし

花宴と葵宴の間

源氏君 廿一

即位を東宮に譲りてありぬ

さへ結ぶ

お徳の初よハ 又これ

柳亭

同君 廿二 十一月朔日崩

にき

按お徳の初よハ桐壺帝とありぬハ是ハ桐壺帝にことし
に之る帝をうれハ後のお徳とむ人乃 然なる所名多し一即位を
ありさへあひて後ハ此ハ
院とのことなり

以香子 三十七 三月廿日うせみふらうせきうらひお徳いふくは後待まに
後未紫子 三十七 三月廿日お徳いふの
お徳いふの徳日 三十七

女五宮

朝良子 三十二 源氏君 よこぶ 朝良子 三十二 源氏君 よこぶ 朝良子 三十二 源氏君 よこぶ
きく 三十二 源氏君 よこぶ 源氏君 よこぶ 源氏君 よこぶ

藤坊

実ハ相去帝の序

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

八月八日 源氏君 よこぶ 八月八日 源氏君 よこぶ 八月八日 源氏君 よこぶ

秋好中宮

冷泉院の中宮 三十二 源氏君 よこぶ 源氏君 よこぶ 源氏君 よこぶ

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

入中 三十二 源氏君 よこぶ 入中 三十二 源氏君 よこぶ 入中 三十二 源氏君 よこぶ

柿事 三十二 源氏君 よこぶ 柿事 三十二 源氏君 よこぶ 柿事 三十二 源氏君 よこぶ

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

文に任 三十二 源氏君 よこぶ 文に任 三十二 源氏君 よこぶ 文に任 三十二 源氏君 よこぶ

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

梅子 三十二 源氏君 よこぶ 梅子 三十二 源氏君 よこぶ 梅子 三十二 源氏君 よこぶ

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

三十二

葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ 葵子 三十二 源氏君 よこぶ

三
の秋よりをよせ多くし... 若菜上のまじれぬやのに
わきあきくもるも... 若菜の用は秋は中
とつらみハニくは是も御座るもこの
後よりなる御座るありし

朱雀院

一々 山の...
内母弘徽皇后大后二条太政大臣女

桐葉書 三坊 口本に一のこ右左の世の世の世に... 口本に...
乃云あきくもるも... 若菜の用は秋は中
花葉書と葵書との用は位は...
漢標書 係年若 九十九 二月九日 即位
若菜上書 口若 三十九 十二月廿二日 若菜の上は若菜の上の...
ちりしりし

同書 口若 四十九 二月西山の...
若菜下書 口若 四十七 十二月廿二日 若菜の上は若菜の上の...
按 朱雀院... 後の御座る...
ちりしりし

冷泉院

内母高雲女院史帝御女
美の桐葉書... 若菜の上は若菜の上の

紅葉賀書 係年若 十九 二月十宗日 即位
花葉書と葵書との用は...
漢標書 口若 九十九 二月廿二日 若菜の上は若菜の上の...
若菜下書 口若 三十九 十二月廿二日 若菜の上は若菜の上の...
按 冷泉院... 後の御座る...
ちりしりし

今上

内母兼善女御御座る...
冷泉院の... 若菜の上は若菜の上の

早蕨 口君 九五 二月廿五日の事と云ふ事案小福の事と云ふ
り〜之也

女二文

若菜上 口君 二月廿五日 女二文

今上

母兼多殿女侍兼是右大臣妹
実ハ兼多院の白子

明石 口君 九八 春の案に〜南代〜右大臣の事と云ふ

兼多殿の女侍乃由殿之男と云ふ事案小福の事と云ふ
ハ〜

伊藤

伊藤 口君 九九 二月廿五日 立坊

梅枝 口君 三十一 二月 春日侍之殿

若菜下 口君 三十一 前位

宣長は侍と法抄に今上と云ふハ〜事案小福の事と云ふ
相違事と云ふ〜又その人〜事案小福の事と云ふ

女一文

此ハ〜事案小福の事と云ふ
法抄に〜事案小福の事と云ふ
母弘徽殿女侍

白文 口君 二月廿五日 女一文

た〜と〜白文の事と云ふ事案小福の事と云ふ
〜

女二文

母兼多右大臣女

竹川 口君 三十七 四月廿五日

白子

母右大臣

竹川 口君 二月廿五日 女二文

〜

東家

母明石中女侍源氏君女

若菜上 口君 四十一 三月十日 立坊

若菜下書 口若 四十六 東宮小たてせり

女一文 二の文 神母末文小四

若菜下書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
城上の 若菜下書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに

今按は文のつれは二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

白文書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

若菜下書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

浮舟書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに

浮舟書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

赤部文 二の文 神母末文小四

若菜下書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

白部文 二の文 神母末文小四

若菜下書にりし東宮のめはるし一しの女のめはるしに
二の文の西條の事にして若菜下書にりし東宮のめはるしに
若菜下書にりし東宮のめはるしに

権左衛門 二月廿日 神楽詣

徳角 八月廿六日 宇治の申君小倉御多

早世殿 二月七日 中君と二重御小倉御多

寄生 八月十六日 夕音君の六君におい

按 白文まゝ小倉の世にありふりし
くわゆるおとせめくひつりけり

若宮

中君中君の孫八重御

寄生 二月二日生れ

常陸宮

四の文
中君更衣

白文まゝ 正月夕音君六重御中 賭弓のうり

中君ふりおのり 此の文は御ゆる更衣後のの思ひ

あけしこい 大御夕音君より

まねけり 此の文は御ゆる

まのきいのさきりてまゝ

寄生 三の文 一の後世の友妻り

つらハこの文 五の文 此の文は御ゆる

五宮

中君更衣に

白文まゝに

按 寄生まゝに中君更衣てきたらハ白文あり一寄生まゝに
つら麻上に御ゆるしとせし中君のこころハつらの中御と
此の文は御ゆるしとせし中君のこころハつらの中御と
白文まゝに御ゆるしとせし中君のこころハつらの中御と
まのきいのさきりてまゝ

女二之文

後世の文
中君更衣に

寄生 夏中君更衣に

十四

二月廿日 此の文は御ゆる

四月三日 此の文は御ゆる

光源氏

二条院 源氏の中納言 左大臣 大納言 大納言
内大臣 右大臣 左大臣 大納言
源氏の中納言 左大臣 大納言

桐壺女三歳小生れ三歳

門三歳 着袴三歳 一年夏清母交三歳せ三歳

門七歳 山七歳初七歳後帝七歳け七歳こと源氏七歳小生れ七歳く七歳か七歳て七歳ま七歳

年三六終り

門十二歳 之後十二歳之十二歳被十二歳引入十二歳の大十二歳臣十二歳の十二歳喜十二歳に十二歳退十二歳お十二歳た十二歳大十二歳臣十二歳の十二歳小十二歳女十二歳葵

上十二歳山十二歳い十二歳か十二歳に十二歳集十二歳り十二歳ま十二歳け十二歳以十二歳二十二歳条十二歳院十二歳と十二歳造十二歳る

桐壺女十二歳と十二歳帚木女十二歳の間十二歳 十一歳より十二歳との間より 中納言十二歳

帚木女にまじりて中納言に

御十六歳成十六歳不十六歳賀十六歳女十六歳 十月十六歳十十六歳余十六歳日十六歳正十六歳二位十六歳と十六歳成十六歳り十六歳

門十九歳 七月十九歳十十九歳日十九歳中十九歳納十九歳言十九歳女十九歳 中納言の

花十九歳宴十九歳女十九歳と十九歳葵十九歳女十九歳の間十九歳 十一歳 大将十九歳小十九歳女十九歳 葵女に交わりて大納言に

大納言にまじりて大納言に

次十六歳女十六歳 二月十六歳 十六歳より十七歳の間

明十七歳石十七歳女十七歳 三月十七歳 明石女に交わりて大納言に

して明石十七歳の十七歳家十七歳と十七歳稱十七歳る

門十八歳 七月十八歳廿十八歳日十八歳白十八歳宣十八歳旨十八歳下十八歳り十八歳て十八歳山十八歳内十八歳宿十八歳二十八歳条十八歳院十八歳と十八歳入十八歳り十八歳

正十八歳位十八歳何十八歳く十八歳た十八歳ま十八歳り十八歳て十八歳権十八歳大十八歳納十八歳言十八歳と十八歳成十八歳り十八歳

遷十九歳標十九歳女十九歳 二月十九歳内十九歳大十九歳臣十九歳と十九歳成十九歳り十九歳以十九歳以十九歳二十九歳条十九歳院十九歳の十九歳東十九歳院十九歳と十九歳造十九歳

らる十九歳秋十九歳任十九歳官十九歳臨十九歳

圓十九歳座十九歳女十九歳 十月十九歳九十九歳月十九歳晦十九歳日十九歳石十九歳山十九歳詣十九歳

鑑二十歳合二十歳女二十歳 三月二十歳 春二十歳祭二十歳儀二十歳の二十歳清二十歳堂二十歳と二十歳造二十歳り二十歳

松二十歳風二十歳女二十歳 十月二十歳 二二十歳条二十歳院二十歳の二十歳東二十歳院二十歳造二十歳り二十歳花二十歳散二十歳里二十歳上二十歳と二十歳稱二十歳り二十歳

ま

藤二十三歳女二十三歳 三月二十三歳 秋二十三歳左二十三歳政二十三歳大二十三歳臣二十三歳に二十三歳成二十三歳り二十三歳小二十三歳生二十三歳り二十三歳定二十三歳め二十三歳り二十三歳い二十三歳ひ二十三歳り二十三歳

御く解しきされと四位をひて牛車と稱されてお中
に出入り

とくめき 三十三歳 左大臣女御

日き 三十四歳 秋の東院を造り

日き 三十五歳 八月の東院を造り

と掃り

後東院 三十九歳 秋の上天皇に推して西村あり

若菜上 四十歳 四十の西宮あり

若菜下 四十歳 十月中の十日に若菜院あり

いさ

西宮 五十歳 八月 日の上あり

幻き 五十二歳 冬にあり

そくめき 三十三歳 秋の上天皇に推して西村あり

白のまのそくめきとひりり隠れあり
つぎのそくめきとひりり隠れあり
寄生まのそくめきとひりり隠れあり
そくめきの末のそくめきとひりり隠れあり
そくめきのそくめきとひりり隠れあり

夕芳たむ

大子の君 侍中 権中納言 大納言

葵 三十一歳 秋生きあり

内東宮の殿上

浅標孝 保氏君 廿九 三月十六日明石にてせられぬ

松風孝 廿一 秋明石上 母上具一糸一せて入洛大舟の

赤下位 口孝三ひらのこりよらひ

藤吉孝 口年 十二月二條院よりむくひせんとすひもむく

山袴尾のよりり

梅枝孝 口若 廿九 二月四堂表着

後重孝 口若 廿九 四月廿五日去るより相違とす

入内のは月日のやハスル以上の四月の事
二条院の山をきハサハ日れ極ありり

若菜孝 口若 廿一 二月十五日去るより

山法孝 口若 二月十日去るより

梅枝孝の御より入内東の事
白中孝の御より入内東の事

薰右大将 源右位 四位の信俊 源中納 宰ある 源中納

柏木孝 保氏君 廿八 壬午生れぬ 口孝の事よき 源中納の御より

白文孝 廿四 冷泉院 院 保氏君 二月二條院

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

冷泉院の 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

又秋の条より右進申ぬ 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

院 保氏君 院 保氏君 院 保氏君

うしよ

寄生書 日年 九月廿五日 宇治の御方より多しお八女の子孫殿と
山寺に御して浄堂造らるりて撰りし

日書 日年 二月廿日 後大納言の成右太右衛門をけりし
一月廿五日 今よの女二女と御ありし

東屋書 日年 宇治の浄堂造りててぬるよりし

梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
つげしとき又しよのかうしよしよの白ひあしよしよしよしよ
あまのこひあしよしよしよしよしよの御にりし中ねし時よりし
あまのこひあしよしよしよしよしよの御にりし中ねし時よりし
あまのこひあしよしよしよしよしよの御にりし中ねし時よりし
あまのこひあしよしよしよしよしよの御にりし中ねし時よりし

次郎書

右馬頭 山母のこし 重井 紋仕右政大臣女

夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし

若菜下書 日年 四月廿五日 宇治の御方より多しお八女の子孫殿と

乃系云れたおの山寺に御して撰りし

あまのこ又十二月同日 試案に御にりし中ねし時よりし

白あまのこ 日年 賭りののしよしよしよの御にりし中ねし時よりし

院書 志の山寺に御して撰りし

右大納言の成右太右衛門をけりし

たてしあまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし

綴角書 日年 十月廿日 白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし

しよの山寺に御して撰りし

ねしよの山寺に御して撰りし

次郎書

権仲細云 山母のこし 重井 紋仕右政大臣女

夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし
夕書書にしよ 梅白あまのこに例の世人のあまのこを御にりし中ねし時よりし

口まゝのふこの君は尚君はひら〜の御〜
飛騨里 小そきり
日まゝの〜
若菜下まゝの御〜
肉の〜
むらて〜

若菜下まゝ四十七 十二月兼在院のふ十四日の試樂〜
麻草五 月賭弓のつら〜
中文章

白まゝ二十 正月賭弓のつら〜
中文章

三市君 右大弁 四母三条上

夕まゝ二十 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

若菜下まゝ四十七 十二月兼在院のふ十四日の試樂に一万

歳末五 月賭弓のつら〜

白まゝ二十 正月賭弓のつら〜
中文章

権中まゝ廿二 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

夕まゝ 四子の公を右大弁侍後の宰相権中が將 藤人の
玄清依とと寄とあり〜

四市君 侍後の宰相 四母三条上

夕まゝ二十 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

権中まゝ廿二 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

白まゝ二十 正月賭弓のつら〜
中文章

五市君 権中ね 四母内侍の子

夕まゝ二十 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

権中まゝ廿二 二月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

白まゝ二十 正月賭弓のつら〜
中文章

八月廿日廿七 正月賭弓のつら〜
中文章

は君母也

六節君

長人の女は元將 三位中納言 幸成中納言
四母之系上

夕方妻ふらむ

按改かゆよりふらむ夕方妻をりて
たうらうに里節君よは

竹川妻云長人の女はもとふらむ一之系辰の心板也是君
たらふらむしひきこしつらきまふ云

権中妻

兼君
九之

白玄初は玄初御話ふらむしひきこしつらきまふ云

竹川妻

口君
九之

よらふらむありし一之位の中納言とふらむひて

是くありし口妻 口年 終宰相ふらむしひきこしつらきまふ云
中納言 廿七八年
賢忌の四女 女中 小女をを一人

東玄の母

大服君 女中
四母之系上

東玄の母は二系辰の女はもとふらむしひきこしつらきまふ云
中納言 廿七八年

夕方妻に又也

白玄妻にのふ大姫君ハ東玄 今上の
よらふらむひて又き
ろふ人たうきさほめてさふらひきこしつらきまふ云

式部宮の女

中の君
四母之系上

夕方妻につらむ

白玄妻ふらむ二系辰 今上の二系辰
おあしおの 六系辰 孫殿
と時々の心板はよらふらむひて右の心板はよらむしひきこしつらきまふ云
中納言

三の君

四母之系上

夕方妻ふらむ三の君は元將 君はもとふらむしひきこしつらきまふ云
花殿里上

四の君

四母之系上

夕芳書^二山^一の^二山^一

夕の君 四母二条上

夕芳書^二山^一の^二山^一

白兵部^二山^一の^二山^一 六の君
四母二条上

夕芳書^二山^一の^二山^一

白文書^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

秋の糸^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

早蕨書^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

八月十六日白文部^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

早蕨書^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

寄書^二山^一の^二山^一 八の君
四母二条上

二、三、四母二条上

按はと男^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

なす^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

藤人^二山^一の^二山^一

権中書^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

山子^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

竹川^二山^一の^二山^一 五の君
四母二条上

次中好

寄生書 七五 六の君塚裏の暮夕吾君より白紙に大書
の存たよやうとよりお前もいふはまの政中好して
宜くまうと又いふはまの政中將也をさけていたい
まうと

抄は人伝布の素家世に及れお前もいふはまの政中好して
たうお前もいふはまの政中將也をさけていたい

七師君

寄生書 七五 四月初日今よ最の暮夕吾君より白紙に大書
お前もいふはまの政中將也をさけていたい
まうと

抄七師君より七人の御子ありて今よ
お前もいふはまの政中將也をさけていたい

〇寄生書 七五 秋二ふふふふふふの御小中候様と云へりふふふふふふの
位のお前もいふはまの政中將也をさけていたい
七師君
あうと

〇寄生書 七五 土月大坂御書君の御書巻上りお前もいふはまの政中將也を
さけていたい
七師君
あうと

御書

雲兵衛に書

御書 七五 二月の末に帥の書

御書 七五 三月廿五日御書のお前もいふはまの政中將也を
さけていたい
七師君
あうと
〇寄生書 七五 二月廿五日御書のお前もいふはまの政中將也を
さけていたい
七師君
あうと

お梅さまも申さね小父さまうせむひー後母上梅様よりして
梅原大納言後小お梅
右大臣の御許小すゝまひて家のいへ又家の御者と
申由白き御はらふらふか〜御身おひ〜人
寄生さま小ひふ白文の何〜ある御包おぬハ梅原の大納言の
こ〜さのいへ〜とも様おや〜た〜れ〜

白文

后母兼言殿女中 御文流し

お梅さま御女中 十月十日自末在院ハり家のいへ〜
兼言殿の御〜の御のこ〜の言ゆ〜秋風宗兼多〜
かん〜い〜のい〜のい〜

御文

言ま〜に花散里の上ハ海女君に言ま〜知〜のい〜のい〜
の〜ま〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜
は〜い〜か〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜

梅原兼言殿女中御文流し
お梅さま御女中御文流し

晴吟歌初に文

東屋君に申すおのい〜と兼言小おのい〜
梅原兼言兼言君 三月の東よそのい〜御のい〜のい〜
梅ひよ〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜
う〜れ〜ま〜のい〜のい〜のい〜のい〜

梅原兼言殿女中御文流し
お梅さま御女中御文流し

侍従

后母いへのいへ

二家の君

后母いへのいへ

晴吟歌山いへい〜のい〜のい〜のい〜のい〜
のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜のい〜

此に又かみ神をすすむるをせしめたりといふ事ありき
後よりあつて梅ひ住りしき家のより一きとあつ
りれいさ路とらふ所より一町の山里もたまりりたり
たりといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
推中考廿二 秋の初日のあふ寺にありき結核の日
よりあつて八月廿日おとせし

婦君

内母中女大長女 梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原川君のとつての梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

のひにさつたつてつてあつていふ事いふ事いふ事

梅原君のとつての梅原君と少のあつての女長

梅原君のとつての梅原君と少のあつての女長

中の君

梅原君のとつての梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長

梅原君と少のあつての女長
二月七日白雲二条路に梅ひあり

新嘉坡 廿年 八月二十九日 情 姫々

門書 廿六 二月二日 君君とて言多ふ

批紙布の裏面に友に送る中の書
こゝに書かれたのは

浮舟君

西暦 廿年八月二十九日
廿五年 九月廿五日

福ふらふ友よ 此の書は 故人の書に
まけける 福船にけり 中ねの君とて 仔細に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
き 福の船にけり 中ねの君とて 仔細に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
小おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に

おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に
おとせ 友よ 此の書は 故人の書に

批紙に書かれたのは 廿五年九月廿五日
廿六年八月二十九日

門書 廿六 二月二日 君君とて言多ふ
よとせ 友よ 此の書は 故人の書に

按は支のつぎは舟君は二月も初出小のつてまひらう
又こころ

東屋書 10年 八月舟君は舟君に逢へた近におふきせんとせしに
お将ハ常陸君のまこととめて引たう(てまは赤の娘山からひ
そむ母う)又舟君と申の君ふりて志ちして二条院へ移し
まわし
は平の初出小のつてまひらう
人けし常陸君方ふつちよりたうき け時自ふかして舟君と
對面し舟君と母とくけりてまひらうやうに二条の赤く移り九月十三
日若君二条の赤くおいて舟君舟小を初めひ又の日守
のふに移りし舟
舟舟書 10年 正月自ふはみとれてまひらうむ
船出書 10年 二月末つて舟君おりせぬよとて
舟舟書 10年 小舟尼君初出のころに守治院へ若うは舟君
のころふとわておいて舟君をふるはちてはひ小舟家へつ
口―秋尼小舟

按舟君は舟君に逢へた近におふきせんとせしに
舟舟書 10年 正月自ふはみとれてまひらうむ
船出書 10年 二月末つて舟君おりせぬよとて
舟舟書 10年 小舟尼君初出のころに守治院へ若うは舟君
のころふとわておいて舟君をふるはちてはひ小舟家へつ
口―秋尼小舟

冷泉院

第在院の東よりたちり神代をりくせり
のゆるし 按九条のふり 相毒寺十

不宮

花宴書にりふし人教に女一のあやめおはひ
相毒寺に弘徽殿のふりてまひらう
按一平系圖に二宮とまひらう 舟舟書 舟舟書にりふし人教に女一のあやめおはひ

茶舟院

舟舟書
舟舟書にりふし人教に女一のあやめおはひ

花菱まゝ小女にあらまゝ

葵まゝ保合系 十一 けしきよしのあまみづとあつたてに後の女にあらまゝ

柳まゝ口名 廿四 きの原よりあまみづにあらまゝ左邊五月廿四日 相毒寺前 あつたて

よゝ六朝のあまみづにあらまゝ

○先帝

相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

式部口官

保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

房雲女院

相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

あまみづ保合系 相毒まゝ口名 廿四 けしきのあまみづにあらまゝ保合系

源中納言

九三書

後禰子 源氏君 二十七 より式部に文の九三書送る上 廿七 廿七
 らうらそか 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 梅枝の事 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 うせり 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 宰相申 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 かくに 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

若菜下 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
源氏君 二十七

若菜

若菜下 源氏君 二十七 十二月多葉院降賀の武楽の系式部
 文の九三書の事 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

中將

侍従

民部左補

志本 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

源中納言の事

源氏君 二十七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

後禰子 源氏君 二十七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七
 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七 廿七

橘右衛門 橘右衛門の由緒の事いふは
けふはひまの事いふは
りの天うけひまの事いふは
むらうりまの事いふは

け系上

橘氏君方 二条の君の事いふは
母故極宗大御女

若女末子 二月橘氏君の事いふは
の傍助の坊主いふは
て尾君の事いふは
の程小尾君の事いふは
とりの事いふは
夢久事 橘二条の君の事いふは
とりの事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

冷泉院の女侍

中の君

橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは
橘氏君の事いふは

とほめき 臣氏君 三千三 夏の業よりいふは別れの業とぞいふ今ふお別
けとてけいせつ 臣氏君 三千三 てやむとてあぢはらぬとてふおひするはむすめ
ほいろく 臣氏君 三千三 であつて 君 臣氏君 三千三 王女御母とぞいふ
あまをい

○常陸宮

西父かきほりかき

末摘花をふ友常陸のまこととせん也

禪師君

醍醐の阿闍梨

葦原をきよよ まつひ花の君の りせうとの禪師の君とせん也

神もをき 末摘花の君の たつこのつらうの君はあらういーけんとて

きぬく 末摘花の君の えぬひけらてあみふさぬ 君 まき 君 一後

さむく 末摘花の君の けらて 君 らう 君 せい 君 らう 君 らう 君 らう 君

抄小つらうの君の赤きしりふとてあやこの御ハお君の身をとりてまきぬと
まてハ葦原をきよよとせし禪師の君とせん也とせん也

末摘花君

常陸まの君

末摘花を 源氏君 夏の業よりいふは別れの業とぞいふ今ふお別

けとてけいせつ 源氏君 てやむとてあぢはらぬとてふおひするはむすめ

ほいろく 源氏君 であつて 君 源氏君 王女御母とぞいふ

あまをい 源氏君

抄小つらうの君の赤きしりふとてあやこの御ハお君の身をとりてまきぬと
まてハ葦原をきよよとせし禪師の君とせん也とせん也

若菜を花にほよ東の陸より小町を移し

若菜は若菜の草と云ふべし流布の草は若菜は若菜の草にほ若菜の草と云ふべし
若菜は若菜の草と云ふべし流布の草は若菜は若菜の草にほ若菜の草と云ふべし
若菜は若菜の草と云ふべし流布の草は若菜は若菜の草にほ若菜の草と云ふべし

○中勢のま

中勢のま

松風まにりふひり 上のま 若菜の花を移し中勢のまと
まにりふひり 上のま 若菜の花を移し中勢のまと

父

若菜の花を移し中勢のま

若菜の花を移し中勢のま
若菜の花を移し中勢のま
若菜の花を移し中勢のま

入乃掃磨言小方

石上の母若菜

松風ま 小町石の上 小町石の上 若菜の花を移し中勢のま
若菜の花を移し中勢のま

若菜の花を移し中勢のま

若菜の花を移し中勢のま

若菜の花を移し中勢のま

○大臣族

○攝政を改む

引継ぎの如く 大長 改仕の如く

源氏君の如く 夕芳君の外祖父

相承る源氏君 十二元徳の如く引継ぎの如くとも

柳保食君 其の如く引継ぎの如くとも引継ぎの如くとも

たる世の如くさゆよのうくおわして改仕の如くとも

とさなひくもらひさせたりとせめてくさひすひ

てふりおまひぬ

源標九若 二月冷泉院即位して後改仕を改む

源改一若 改仕を改む

源雲三十二 改仕を改む

致仕を改む

源氏君の如く 致仕を改む 致仕を改む 致仕を改む 致仕を改む 致仕を改む

母相承る如く

相違ふ小い西子ともやまもまはりにあり申ふ事の内は
 いく人のちおめていとも若うあきと右のおとりのは中
 いらふ福とささうくもあつてうきまは口の
 不遂せきあうおさけりてうきたるはけいも
 きはついといともおふん
 帯本まゝ小改中ねとせ

源氏君 十八 十月十日日暮昔院一の暮の夜西の位下
 小あうてい
 夢考 廿二 又之位中ねとせ申

須磨考 廿七 まるの条にいふ大坂の二位中ねいとせ申あ
 小あうてい
 涙標考 廿九 二月の条にいふ幸お中ね松中納言とせ申あ
 為雲考 廿三 秋の条に大納言めて右大ねとせ申あ

いとあま 廿五 よいふ大ね西の位とせ申あ
 いらり 廿六 君 ゆつていふ
 最末御考 廿九 秋を改大ねとせ申あ

若草考 卅一 よいふあまのあはけはのあまらり
 わいぬ 卅二 けいまにちの

白雲考 卅三 既ふとせ申あ
 白雲考 卅四 白雲考
 白雲考 卅五 白雲考

た申事

若草考 卅八 三月源氏君まらりての位お申あ
 中ね考 卅九 中ね考
 た申事 卅十 た申事
 ちちあうおる

たふさく 一本茶ふに花をまき小申の夜夕敷まきゆ花人の茶とていふ人かや
の茶とていふは流石に夕敷まきゆ夕敷まきゆとていひてこりやゆき茶に茶の
花をまきゆに茶の中におもてまきゆはひてまき

左衛門守

後大納言

とていふ者 保氏君 二十九 よりいふ左衛門守持中納言とていふ服あれ

左衛門守 保氏君 の世のてありのまに 大納言 今もあつていふとていふ

とていふ 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

とていふ 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

とていふ 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

まうとていふ

持中納言

とていふ者 保氏君 二十九 よりいふ左衛門守持中納言とていふ服あれ

左衛門守 保氏君 の世のてありのまに 大納言 今もあつていふとていふ

保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

葵上

相堂 保氏君 十二 源氏君はとていふ夜の夜を初より 保氏君 始まるといふ

とていふ者 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

とていふ者 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

とていふ者 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

とていふ者 保氏君 はあれいふこと 一年十月におおきおの 保氏君 始まるといふ

柏木権大納言

たの少将中納言 保氏君 右衛門守 持中納言 持大納言 早の申

母は若二条若殿の女

とてあまき 保氏君より八月の大敵 彼は言の君をたのぶお納言と馬
依竹後を交へりいふまゝにさかたあつたれとて
お嬢ま 三十一日 又申おとん 御まゝに後をさかた申おとん 御まゝに
おとん 三十一日 又申おとん 御まゝに後をさかた申おとん 御まゝに

御大ま 秋 又申おとん 御まゝに

若菜上ま 三十九日 又申おとん 御まゝに

若菜下ま 早七 二月中納言 小次郎 御まゝに

おりのま 八月 一年四月十日 御まゝに

柏木ま 早八 喜柱 大納言 御まゝに

柏木本居より柏木まにうせりておとん 御まゝに
お嬢まに柏木のおとん 御まゝに
おとん 御まゝに

毎の少お 改年 大毎 毎の君 柏木大納言

柏木右大臣

母 柏木君小同

柳ま 保氏君 九日 夏らん 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

おの 御まゝに

て凡の白く尾のぬふつきのうらやま(さうじ)のきん

大支

母柱上慈恵在女

弘徽殿女侍

冷泉院女侍の母 廿二の女侍
母柏木君小内

二月辛卯申の夜侍 桂中納言よりあつふの

四月の四つらの姫君十二はあつふの母よりあつふの

中より一月八月内あつふの母よりあつふの母

給合事 三十一 三月給合のつれ右方へ

竹川君に女二名の女侍とて

夕方の大支の女侍

西の宿 三条の上 二条の女侍
母今の梅木大納言の女侍

夕方の女侍よりあつふの女侍と今二名とあつふの母よりあつふの

ありはらぬてあつふの母よりあつふの母よりあつふの

京の大納言の女侍よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

くあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

とてとりあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

あつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

とてとりあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

くあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

あつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

て二条殿よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

白くあつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

あつふの母よりあつふの母よりあつふの母よりあつふの

臨ひつらま

坊主を井の宿より名お侍より八つんはとかくは舟一丸はとて
小夕若君と云ましくま井の宿と毒とやと日下ひまひとて
又つらま
まうてあり

野見入大后小方

お高南侍 かんの君
母夕敷上二位中お女

お高君よは若田家まで乳母の夫の少部と具して荒草
りう十策の時お御死して口ま源氏君おつらま君とて
まうりけは三月肥後のさまの世をとりて肥前さま
四月廿日の御に肥後よむくんとまうらうまうらぬハ
道はく系へのりう九条のまぬく人のまふすまふ秋
八幡少部く又神保まうてまひ右進よ野見入
まは右進よお系のおまふまふ源氏君まひて
十月六日院よむくまうて花らう里の上ふらけけ

お高 口ま 口ま小つらまの町の西のたいふの
まうてまうてまうてまうてまうてまうて

お高 口ま 二月十六日當家まは日父内府 大后 まままま

お高 口ま 秋内侍まうてまうて 口ま まま

お高 口ま 冬野見入君よまは初ま

お高 口ま 正月内よまうりまひ兼香殿の東を曹司と

お高 口ま まうてまうてまうてまうてまうて

お高 口ま 竹川 廿五 夏内侍のまを辞しては姫の中は君まゆら

お高

お高 口ま 坊主を井の宿より名お侍より八つんはとかくは舟一丸はとて
小夕若君と云ましくま井の宿と毒とやと日下ひまひとて
又つらま
まうてあり

お高

お高の今野君

若菜下書 保氏君 四十七 日月の東にりし馬つ巻きのい〜
こ〜か〜を思ひてりしハコキもまた大井政幸相ふ〜
の方向のさ〜を えまひりり〜

出政幸お〜の若菜お〜を字〜
の舟の若菜 保氏君 幸おお〜のハ〜
ま〜
○一本系馬小松おま〜保氏君の冷泉院
政幸おま〜遊月抄の江小枝仕大長
政幸お〜のハ〜
政幸お〜のハ〜
政幸お〜のハ〜

政申ね

幻書 保氏君 四十二 十月大ね教マ書 保氏君 の君を海上〜
系りしハコキ小松おま〜の政申ねお〜
若人のおね
夕書 保氏君 四十一 大ね教マ書 保氏君 の文に〜
お〜

お〜
お〜

浄法書 保氏君 四十一 秋波仕大長より保氏君お〜
お〜

八節君

松極書 保氏君 四十八 正月男勝おのま〜
お〜
お〜
お〜

お〜

若末紫書 保氏君 四十九 十月正家自ハ〜
お〜

いふを妻とてはる御小おろきおとす板仕大の申せし十とありある
せらにわりのくろくすうらうの帝院^{冷泉}西をねごとてゆゑは^{梅小}
公帝君とい人のく^{流布の系圖小}
とせやう御れは^遊ある能ある

大納言

後宰相

八月十日白き朝のまは^{秋芳}六の君よあり

その日の系にり^{秋芳}小方^{重井}のいとらうらの^{梅小}後宰相

梅とあまきふり^{大納言}後宰相^{梅小}

十條(おの)は^{秋芳}の^{梅小}
は^{梅小}の^{梅小}と^{梅小}
とあ(お)は^{梅小}

○二條右政大臣

系流院外祖父

桐葉^{源氏}君三 又右大臣とて也

柳^{口君}又右大臣とて也

明石^{口君}又右大臣とて也

流布の系系に^{梅小}
梅柳又^{梅小}

大納言

柳^{口君}又右大臣とて也

政の毎

柳^{口君}又右大臣とて也 柳^{口君}又右大臣とて也

は^{梅小}の^{梅小}と^{梅小}

の政の毎とら^{梅小}あ^{梅小}せ^{梅小}は^{梅小}

いふあまのこゝろのまじりあはれに
大ね原のこゝろのまじりあはれに
つらぬりたるをうたふてゆめふち
そらむこゝろのまじりあはれ

藤原京殿女侍 朱雀院女侍

柳きよこゝろ 女侍

弘徽殿大臣 朱雀院の御母 一のこの女侍 右大臣の女侍 赤文の女侍 大臣

桐壺まゝに右大臣の女侍 又一のこの女侍 又弘徽殿の女侍
藤原氏若菜世一第二年の間に立派のまじりあはれ
若菜よまゝに先ふりてあはれむ
よらけのまじりあはれむ
つらぬりたるをうたふてゆめふち

白ひょう
月あはれ

按服有小女侍と有り是ハ相壺をなす
相壺まゝに今后とす
若菜よまゝに先ふりてあはれむ
よらけのまじりあはれむ
つらぬりたるをうたふてゆめふち

御文の仕方

花まゝにす
か末のこの君のあはれむ
か末のこの君のあはれむ
か末のこの君のあはれむ

後仕を政大臣の仕方 一の君 柳本君和妹君母

相壺まゝにす
後仕の
か末のこの君のあはれむ
か末のこの君のあはれむ
か末のこの君のあはれむ

一の君

花菱をにんむ かたはら

朧月夜の内侍のうら

六の君 中画殿 九人の君

花菱を 源氏君 二十 二月廿五日南殿の橋乃宴あり 源氏君と夜
弘徽殿の細殿より思ひくゆくわくけ君小倉御多し別ま
多ひて後思ひやうもか御侍の御小いおうう一人乃
さゆふか御侍 弘徽殿 の御侍ならよこそははれめまう下をれ
ぬい五人の君あらんううそのま乃少の方及御侍のま
めぬ口の君あつ社ううと愛うう中くそれらま
うい今うううううううううううううううううううう
人との 右の君 御侍ううううううううううううううううう
葵を 右の君 二十 二月内侍のうううううううううううう
柳を 右の君 廿四 二月内侍のうううううううううううう

若菜上 右の君 廿四 若菜院の山うりの後活のあめい
ううう二条のまに住まうううう

若菜下 右の君 廿七 若菜院の山うりの後活のあめい

流布の系圖小二条の内侍うううううううううううう
○ 若菜上若菜下源氏君の御侍多し一おむらう月夜小あくあめい
うううううううううううううううううううううううう
も入月のあめいありあうううううううううううううう
朧月夜の内侍うううううううううううううううううう
のううううううううううううううううううううううう
移ううううううううううううううううううううううう

口位少将

花菱 源氏君 二十 二月源氏君朧月夜の君と多きひて好む
くく得ぬまうううううううううううううううううう
徽殿 右の君 の御侍の御侍の御侍の御侍の御侍の御侍の御侍
中兵とうううううううううううううううううううううう

ひ——日源氏君のりむに引く者のを——あつきのあはひ
 とりあふとわくりりあふ条よりふたりの口位のおね——つとまらふ
 按流布の系系上流人のあつとらんとおつて最毒の日毒者のよりとつ
 の使で——人としてなれと流うあれた——

右中毎

花毒者——んぢ かたまたま
 ちうら

按柳毒——二系を流布の何れ中ねあふすけあつとつひつちのふら
 け中ねあふの毎とつて八口位あふ右中毎とつて人々とつて流を流す
 おもて流を流す
 考合けく——

今上の正外社父

◎右大臣

原氏君 源氏君
 右大臣 右大臣
 七ハ

按流布の系系上流人のあつとらんとおつて最毒の日毒者のよりとつ
 の使で——人としてなれと流うあれた——

紫雲大政大臣

右大臣 大右 右大臣

源氏君 源氏君
 三十九 右大臣とらんぢ 後徳も右大臣あつ

後徳も り君
 三十七 右大臣とらんぢ 右大臣の流を流す

そあひ——けらあ——たらとつてあつとらんとつてあつとらんとつて
 とつてあつとらんとつてあつとらんとつてあつとらんとつてあつとらんとつて

水の方の系系上流人のあつとらんとおつて最毒の日毒者のよりとつ
 若葉上流 り君
 四十六 五月の流すたあつとらんぢ

いりあふとわくりりあふ条よりふたりの口位のおね——つとまらふ
 とつとまらふとつとまらふとつとまらふ

竹川——とつとまらふとつとまらふ

按流布の系系上流人のあつとらんとおつて最毒の日毒者のよりとつ
 の使で——人としてなれと流うあれた——

後の老政大臣の御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より
去給大臣の御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より
○御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より
よそいひてあまの御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より
くひけりてあまの御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より
括入の御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より

兼香殿女侍

兼香院の女侍 今上の母

昭の御説 保氏君 北八 兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より

香殿の女侍の御説の通り一考して後の方と申す一とて御月抄より

若菜下等 保氏君 北八 兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
のまうりてつうりつうり給ける女侍の君と申す一とて御月抄より
つうり給ける女侍の君と申す一とて御月抄より
とて御月抄より

改申ね

柳考 保氏君 北八 兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より

美木柱上

美木院の女侍 今上の母

梅柱考 保氏君 北八 兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より

兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より
兼香の条より一考して後の方と申す一とて御月抄より

何れをもちもつて...
多ひ...
いあ...
て...
ゆ...
梅...
竹川...
梅...
君...

後中納言

母...
母...

竹川...
後中納言...
糸...
と...
昇生...
母...

次市君

母...

梅...
母...

右...
三所君...
母...

梅...
母...

若...
母...

弟ふりしよとあはれおのりしよとあはれ
の君 おきき いたつとまてとあらん勢うれしよとのまひりしよと
大姉 おきき のかちつりてよはみは後んせんとてやうおは
しやうにやうまけうみの何ゆゑのまておはすしよとのまて
おひりしよ

若菜下書 四十七 正月朱菴院のあけの四賀の試楽の条
いふ右のお梅い後 おきき のし所ん人の君のしとらうのりら右
さうの笛きり一年十二月廿六日一はかゝの試楽の条
いふ右のお梅い後 おきき のし所後まて

竹川 十五六 正月夕方若菜下書しよと訪ひし条 おきき
よあし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし
ふし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし
又いふ おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

高うぬ おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし
毎て おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし
そけ おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし
おと おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

寄生 おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

右大衆

口師若 右中衆
母九 おきき のし おきき のし

若菜上書 おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

若菜下書 四十七 正月朱菴院のあけの四賀の試楽の条 おきき
お梅い後のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

竹川 おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし おきき のし

改申若

竹川の若 後侍
母九 おきき のし おきき のし

竹川孝に侍従の君に中女あり一孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり

冷泉院の女廿二男この母母母は藤原の

竹川孝廿二男三月廿二男十八九廿二男一孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり

内侍のか中の名母母は藤原の

竹川孝廿二男夏母君のゆつりをえて内侍の中女あり孝の孫に中女あり

按竹川孝廿二男内侍の中女あり孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり

○大臣

栞卷中女あり

六条の息中の名母母は藤原の

夕中女あり栞卷中女あり孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり

按中の名栞卷中女あり孝の孫に中女あり孝の孫に中女あり

父

流しもの

藤原殿女侍

相違奉の女侍

花敷里まゝの白平文の

花敷里の上

この春 春のほろこ 夏のほろこ 秋のほろこ

花敷里まゝ藤原君より小れはけいせん相違奉のとやたら
 もおしをけ院くれさせまひてのちやうくきふうゆき
 さゆととのほろ大お夜のほろよもてかきわてまてま
 るく藤原殿はおらうこの春花敷里うらまうゆて
 ほろくおのまてまひちやう候のほろあねとまてま
 くれ又りふおあまて小のほろあへまてま
 松風三十一ふり二の東の花の里ま

一 福にまおのたいうこのふうけてまこうけい
 一 ちいらうきまあうおうせままま

一 ちいらうきまあうおうせままま
 一 ちいらうきまあうおうせままま

花敷里まゝの白平文の
 さとまぬ花敷里まゝの夜まひてちやう候のほろあねとまてま
 いち花敷里まゝの白平文の
 さとまぬ花敷里まゝの夜まひてちやう候のほろあねとまてま

大は

若はふまゝちやうの

入道播磨守

えは近衛の中ね

若菜上源氏末
十八よりふかのまき結うめまれのつもとみちの嫁か
つきたるおいられたか—大層の後へて出てくもす
りる人の世のひつめのまき—らひもたる通付の申を
すてやまらぬらうらうらむわんごのまう人よもさ—
らふつ—まごかぶのめいんく—く又たもめいんく
く—らしらう—はらうとく—昭名の傳よ住居下は
こ昭名まにしま位の娘
かろしき

昭名昭名
廿七二年のつとまらり—

若菜上昭名
廿七三月昭名母のほねのまきしきり—
まてこのせいのつらひか—てまのまか—
なまねる田ん—まき—てはひま—

昭名上

えいのち—昭名のつと—まのま—
母は中勢の—まき

若菜上昭名
廿七

昭名昭名
廿七八月十三日源氏若小をさま

漢標昭名
廿九三月十一日昭名中まことしむ

松風昭名
三十一秋娘若と母の尼若と日—く京小のあり大井
のあふ位む

とよめ昭名
三十五十月六日京の乾の町小娘

拙者つくまに昭名のつと—まのま—
昭名のつと—松枝まにまのつと—

梅系大綱

梅系上昭名
三十五

源氏若小をさまのつと—まのま—
とよめ—ひ—つと—まのつと—

雲林院の律師

柳源氏君 秋源氏君を律師と信ず小室より秋の御も
こまひくそらや林邊ふましくまう有母は是の口せし
との律師のふりまの坊よて信文かよとをいひ
そわや〜二三日のりかひるふありぬあゝあゝ

桐壺更衣

源氏君の母 師長所
桐壺更衣の母の口せし
母 源氏君の母の口せし

桐壺更衣源氏君 小侍の御もふ〜二日後源氏と上層より
口〜源氏君 夏病ふりて里にまうてまはし御車車と
件さうやうてうせまふも御のふりあつた位とあつた
桐壺更衣の更衣より桐壺更衣に御のふりあつた位とあつた
あつた〜お侍の御の相つたの更衣といふこと

○父

信源氏君

常陸公の御方

赤橋花の母上

常陸公の御方源氏君 はつたの母お方のとらうらうら
あま〜源氏君 のお方にあま〜のさうらうら

大御の御方

右源氏君

○お大長

桔梗きに入源氏君

女侍

雲林院の女侍 口せし

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

○大信

楊殿まにるの 中

定法八女の山方 大君中君の四母

楊殿まにるの 中
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

父

常法の命れ山方 母君の四母 中君の四母

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

しつとてあはれりきまはあめしつとてあはれりき
てハのまに作して浮舟をさうしつとてあめはつとて
めてとあはれりきさうしつとてあめはつとてあめはつとて
のまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
うまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて

右中条

権中条しつとて

糸尼

糸の若 糸のあひや
母柏本君の乳母 楊姫より糸尼の細工のあひや
は糸の若より糸尼のあひや

楊姫より糸尼のあひや 柏本君は糸尼のあひや
しつとてあはれりきさうしつとてあめはつとて
西の海のまてふりつとてあ常陸の介となりつとて

中条より糸尼のあひや 糸尼のあひや
のまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
うまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
たりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
たりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
たりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて

○竹川丸

竹川丸より糸尼のあひや 糸尼のあひや
のまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて
うまふりつとてあ常陸の介となりつとてあめはつとて

二位申ねの山方

竹川幸ふり女房の申ねありしと二位の申ねありしひりそ
ありしと女房の申ねありしとえしとありしとありしとありしと

